10．鼻アレルギー患者に対するヒスタグロビンネビュライザーの使用経験
——1/10バイアルと1/4バイアルの比較を含めて——

佐伯和夫、兵　行和、柿内寿美、
星谷　勤、松永　喬（奈良医大）
玉城　進、庄司和彦、北村溥之、
東辻英郎（天理よろず病院）
梁川明久（県立奈良病院）
芦田恒雄（東大阪市）

＜はじめに＞

ヒスタミン加ヒト血清グロブリン（ヒスタグロビン）は、鼻アレルギー治療薬として従来より皮下注射法により広く使用されてきたが、最近ではネビュライザーで投与する試みがなされている。今回我々は成人および小児の鼻アレルギー患者にヒスタグロビンネビュライザーを、1回使用量1/4バイアル群と1/10バイアル群に分けて使用し、その治療効果を比較検討した。

＜対象と方法＞

対象患者は成人18名、小児19名の計37例で、いずれも通年性鼻アレルギーを有し、皮膚反応、鼻粘膜誘発反応、鼻汁好酸球のうち、少なくとも2項目以上陽性のものとした。ヒスタグロビンは1回使用量1/4バイアルまたは1/10バイアルとし、原則として毎週3回計12回投与した。治療効果は自覚症状、鼻粘膜所見、血液検査の3点につき判定した。治療効果の総合判定は、これら3項目の改善度に主治医の印象を加え、著効、有効、やや有効、無効の4段階に判定した。

＜結　　果＞

全症例中有効例は総合判定「有効」以上で54%、「やや有効」を含めると76%あった。成人と小児を比較すると、成人では「有効」以上が44%、小児では同じく63%と、若干小児の方が好成績を示した。1/4バイアル使用群と1/10バイアル使用群を比較すると、成人では前者に高い有効率が見られたが、小児ではむしろ後者の有効率が高く、全症例を通して見ると1/4バイアル使用群と1/10バイアル使用群は、ほぼ同一の有効率を示した。対象患者を重症度別に分類し、それぞれの有効率を見ると、1/10バイアル使用群では軽症例に有効率が高く、1/4バイアル使用群ではむしろ重症例に高い有効率が見られた。対象患者の病型を、くしゃみ鼻汁型、鼻閉型、鼻閉くしゃみ型の3型に分類して、それぞれの有効率をみたが、病型によりとくに一定の傾向は認められなかった。治療効果を自覚症状の改善率と、他覚症状の改善率にわけてみると、1/4バイアル使用群では両者に良好な改善率が見られたのに比し、1/10バイアル使用群では他覚症状の改善率がいくぶん劣っていた。

治療の前後に採血し、末梢血中好酸球数、ヒスタミン固定能、RASTスコアー（ダニD_2抗原）を測定した。末梢血中好酸球数は治療の前後で著明な変化は見られなかった。ヒスタミン固定能は1/4バイアル使用群にあっては47%、1/10バイアル使用群にあっては50%の症例に改善が見られた。また著効・有効群ではヒスタミン固定能の改善率は78%あったが、やや有効・無効群では20%にすぎず、治療効果とヒスタミン固定能改善度のあいだには著明な相関が見られた。RASTスコアーは治療の前後を通じ大部分の症例では不変で、一部に改善が見られたにとどまった。

ヒスタグロビンネビュライザーにより、局所刺激によると思われるくしゃみ発作をきたした症例が2例あったが、他に特記すべき副作用は見られなかった。

＜ま と め＞

1．鼻アレルギー患者にヒスタグロビンネビュライザーを週3回計12回施行したところ、平均76%の有効率が得られた。

2．小児や軽症患者では1回使用量1/10バイアルでも十分な治療効果が得られたが、成人とくに重症患者では1/4バイアルの方が有効率が高かった。

3．ヒスタミン固定能は対象患者の50%で改善が見られ、改善した症例ほど治療効果も良好であった。